

# 断崖

高岡 啓次郎

斎場の駐車場にカラスが一羽死んでいた。ひび割れたアスファルトの上。静止した目が世界に向かって何かを訴えている。その周りで仲間たちが知らん顔して飛び回っていた。通り過ぎてからも残像が妙に目にやきついた。

つい数日前も岸壁を通ったときカモメが息絶えていて、腐った魚の内臓が干からびてちらばっていた。空中を舞う鳥の中には血縁もいるだろうか。屍を嘲笑うように嬌声にも似た甲高い音をたてて通り過ぎていく。テトラポットにたたきつける海のざわめきが、不規則な波動をもってフロントガラスをふるわせていた。

黒服を着た客をおろしたあと、斎場の屋根からあがる微かな煙を見た。そのとき、日ごろ私を悩ませていた想念が頭を駆けめぐった。一度その疑問にぶつかると車窓からの景色さえ見えなくなる。人の命が地球より重いなどと誰が言ったのだろう。今の私には絵空事としか思えない。さっきまで空を飛び交っていた一羽の鳥の死と、ひとりの人間

を走り、音は従来のものより格段に静かで、その静寂さが私を戸惑わせることもある。

新車の能力はとりわけ坂を上るときに明らかになる。アクセルに軽く力を加えただけで景色はたちまち変化し見えたり車を変えただけなのに、時間の進み方や、とりまく空間そのものが微妙に変化して見えるのが不思議だ。

顧客の反応は確かに上々だった。新たな指名客が増えたのも無関係ではないだろう。だがバックミラーに映る私の表情はさえない。会社に期待されているのは分かるが果たしてこのままでいいのだろうか。漠然とした不安が灰色の霧となってたちこめている。

私は旅館関係に以前の仕事のせいもあって得意客を多くもっている。そのころ知り合っていた人々が宿泊客の送迎に営業車を使うとき指名してくれることが少なくないのだった。驚別にある事務所を起点に、一日のほとんどをアクセルの上に足をおいて過していた。

私はつとめて自分の過去を思い出さないようにしてきた。顧客を乗せていないときは意識して賑やかな音楽をかける。考えれば考えるほど気がめいるのは分っていた。家には空の酒瓶が壁にそって並んでいる。好きでもなかったはずなのに、その力を借りないで眠れることはまれだった。まだ四十の半ばをこえたばかりの自分が、どうして今の穴倉の

の死とのあいだにどんな違いがあるというのだろうか。考えれば考えるほど迷宮に入り込んでしまう。

生けるものの命の重さなんて、どうして解らないことなのだ。もしかしてそれは、ぶら下がっているものの量ではないかと思ってしまう。その点からいえば今の自分にはぶら下がっているものは何も無い。強いていえば、ときどき窓辺に餌をもらいにくるノラ猫くらいだ。私は自由には違いないが、同時に自分の命が限りなく軽いものに思えてならない。

営業車のアクセルを踏みながらそんなことを考えてしまう自分の性向が疎ましい。窓から風を入れて無理やり深呼吸する。さえない顔をバックミラーに映して淀んだ息を吐き出した。かつて、ふつくと艶のあった頬には蒼白い影ができ、眉間に刻まれた皺は隠しようがないほどに神経質な影を作っていた。

室蘭市内の斎場をあとにして予約が入った温泉街をめざした。十一時のチェックアウトに合わせて来てくれと言われている。途中で富塚の霊園に寄り、それから空港へ行くのだという。盆でもないのに今日はやけに死に絡んだ客が多い気がした。

登別温泉から千歳空港までの顧客を乗せる機会が多い私に加速がすぐれた新車が先月から割り当てられていた。あなたは稼がしらだからと主任は言う。すべるように路面

ように暗く寒々しいアパート暮らしするにいたったのか。仕事を離れば、誰ひとり話をする相手を持たないという孤独な境涯におちいってしまったのか。

考えるなど自分に言いよこせる。産出性のない思考はもうたぐさんだ。いちど楽しみを味わった人間は、それを失ったときの苦悩が大きい。確かに私には幸福とよべる時代があったが、そんな記憶にフタをしながら生きてきた。気がついたら、いつの間にかタクシー運転手になって十年の歳月が過ぎていた。

予約が入った温泉ホテルにつくと、午後の便で東京へ帰るといふ三人連れの年配の婦人がロビーに待機していた。車に乗り込んでから、そのうちの一人が言った。

「運転手さん、空港へ行く途中、ちよつとだけお墓に寄りたいのですけど」

「承っていました。富塚霊園ですね？」

そうだと婦人は答えた。温泉街を抜け、登別川を越えてから車は蛇行した坂をあがった。途中から歓声があがった。噴火湾が一望に見えてきた。どこまでも波頭が続く海岸線は夏の光を受けて輝いている。墓参りを済ませるあいだメーターを止めて乗客を待った。まもなく三人は車に戻るなり口々に話し出した。離婚後に亡くなった弟の墓が荒れ放題なのを嘆き、別れた嫁への恨みが語られ、教師をしていた弟のうつ病や財産争いに到るまでを生々しく語っていた。

空港に着くまでのあいだ婦人たちの話は尽きなかった。

タクシーという空間は不思議なものだと私はつくづく思う。まるで運転手を空気のようにみなして、内密なことや他人に聞かせられない話をするところがある。医師や弁護士のような法律上の守秘義務は運転手にはないのに、警戒心もなく話をしてしまうのだ。まもなく営業車は空港ターミナルのゲートをくぐっていた。

三人を空港で降ろしたあと、空が急に暗さを増して雪片が風に混じっていた。そのとき私はひとりの客に呼び止められた。そこは空港のタクシー乗り場から離れていたので一瞬ためらったが、乗せて悪いということはない。車をよせると、六十代とおぼしきサングラスをかけた男性が乗り込んできた。

「急いで室蘭までいってくれないか」と男は言った。空港まで客をおくり、帰日も空車にせずには地元に帰れるとは、営業車の運転手としては願ってもない話だ。私はターミナルを離れてから会社は無線で連絡をとった。車が国道三十六号線に出たとき、うしろの客がサングラスをはずし、胸ポケットから出したメガネにかけ替えた。そのとき私は全身に悪寒が走るのを覚えた。

その男には見覚えがあった。いや、見覚えなどという生易しいものではない。忘れようにも脳髓から拭い去れない人物なのだ。ずんぐりと張り出した腹と脂ぎった大きな鼻

に特徴づけられた下膨れの顔。成金趣味のスーツにこれ見よがしな金時計。度のきつい銀縁メガネの奥からのぞく狡猾そうな目。タバコか酒で潰れた聞き取りにくい声。それはまさしく、かつて私が取引関係にあったG建設の社長に違いなかった。

私は帽子のつばを下げ、少しでも自分の顔が相手から見えにくくした。室蘭で建築士をしていた人間が今この車を運転しているとは想像もしていないだろう。

それにしても、何年も姿を消していたはずの男が何事もなかったかのように室蘭に舞い戻っていたのだろうか。私は声の調子を変え、できるだけさりげなく会話をかわした。「お客さんは室蘭のかたですか？」

信号待ちで聞いてみた。そうだと男は答えたあと足を組み、ふんぞり返って火をつけていない煙草を指の間にはさみながら言った。信号が青になったので私はバックミラーから目を離しスピードを上げた。

「元もと会社をやっていたんだよ。運転手さんは室蘭の人かい？」男は何かを警戒するように私に問いかけた。いぶかしげな視線がバックミラーに映っている。

「いえ、札幌から驚別に移ってきました」

とつきに言うとも男は安心したように話を続けた。

「しばらく各地を転々としていたのさ。情報収集というか時勢を静かに達観する目的があったからだが、去年から室

て生まれた可愛い娘と幸せを絵に描いたような生活を送っていた。少し前から父は友人にすすめられて新しいビジネスに乗り出していった。G建設が始めた格安住宅の専門業者になったのだ。大量に仕入れた材料を一定のパターンに従って組み立てていく工法がそのころ世間の注目を集めていた。一軒あたりの利益は多くないが確実に数をこなすので安定した収益を保証してくれるという。

三十年ものあいだ、地道に個人住宅を手がけてそれなりの信用を得ていた父が、どうして格安住宅の専属業者になる道を選んだのかを詳しく聞いたことはないが、そうまでして年々受注が落ち込んでいく鎖の輪から脱却しようとしたに違いない。父の会社はたちまち手狭になり新しい事務所と作業場を建てた。

そのころ私は定山溪や登別温泉で大きなホテルの増改築を手がけていた。自然エネルギーを効果的に活用する工法は数年前から口コミで評判をよび、温泉建築のノウハウでそれなりの顧客をつかんでいた。収入も安定し、美しが丘に新居を購入する夢も手が届くところに来ていた。

仕事が一段落したある日、父から電話があり、おりいって話したいことがあるといわれた。私は久しぶりに家族を連れて故郷の地を踏んだ。驚別を越えたあたりから町並みは経済の低迷を反映するように、くすんだ灰色に変わった。

蘭でまた新しい会社を興したのだよ。人間はやはり一つの場所に固執してはいかない。いろいろな土地でさまざまな人物に会い、広く学ばないと肝っ玉が育たない。そうは思わんかね運転手さん」

私は押し黙っていた。男は一見してダンヒルの物とわかるライターを取り出して煙草に火をつけた。さも自分が世間を知り抜いているという得意満面な顔をさらしている。青い煙が私の頬をかすめたとき、はらわたが煮えくり返るほどの怒りを覚えたが、その気持ちを抑えこみながら平静を装ってハンドルを握っていた。

——間違いない、やはりあの男だ。私がこの地上であきらかな憎しみを抱いていた唯一の人物がうしろに座っているのだった。車は単調な海沿いの道に出た。何事もないかのように車を運転していたが脳裏には過去の残像が逆巻いていた。この男に係わり合うまでは何もかもが順調にいった。あの日からすべてが狂いはじめた。十年前のG建設の破たんだ。しかも作務的といえる倒産が私をとりまく人々の運命を一変させた。

そのころ父は室蘭で野末工務店という小さな会社を営んでいた。私は幼いときから腕のいい大工だった父を尊敬していた。大学で建築工学を学び、札幌の設計事務所に勤めながら一級建築士の免許を取ったのも父親の影響に違いなかった。勤めて三年目に事務所の女子社員と結ばれ、やが

だが坂のある景色はやはり心がなごむ。海と空の下に広がる錆だらけの工場群も懐かしさを誘った。建築士としての私は錆というものを忌避する立場にいるわけだが、故郷の赤錆色には愛着にも似た感傷をおぼえてしまう。

測量山のふもとにある両親の家でくつろいだあと、父は書齋に私だけをよんだ。かつて痩せていた小柄な父は品のいい白髪がつやをおび、全体にほどよい肉がついて自信にあふれた実業家の顔になっていた。数年前まで十人しかなかった会社だが、もはや三十人の従業員をかかえ、年間二十棟の住宅を建てている。そんな羽振りの良さが話し方に滲み出ていた。

「そういうわけで今の作業場はたった三年で増築をせまられた。来年はワンルームマンションを五棟建設する予定があるからますます忙しくなりそうだ」

たいしたものだねと私がいうと、正直に言えば工事単価の低下競争が激しく、実情が楽ではないことを打ち明け、会社を切り盛りする大変さを吐露した。

「それで、ひとつ相談なんだが聞いてくれるか」

「もちろんだよ。そのために来たのだから」  
父はおもむろに胸ポケットから煙草を取り出し、ライターで火をつけてから私をじっと見た。さまざまな予感が走る。青い煙がふたりの間に漂った。

「どうだ、おまえ父さんの所に来てくれるわけにはいかな

いか？」

「それって本気なのかい」

「もちろん本気だ。でなかったらわざわざ話があるから来てくれとは言わんさ。おまえ会社から幾らもらってる？」

「年収は税込みで六百五十万くらいだよ。かなり引かれるから実際はもっと少ないさ」

「あれだけ大きな仕事をしているわりには安いな」

「そんなもんだよ。公共工事も極端に減っているだろう。仕事が少ない設計屋もあちこちつぶれているよ」

「そうだろうな」父はそういつて大きな煙を輪にして天井に向かつてはき、話を続けた。

「おまえは今三十三歳か」

「来月で四になる」

「早いものだな。今のまま雇われ設計士としてサラリーマンを続けるのもいいが、一国一城のあるじになるのも悪くないぞ。父さんだつてあと何年社長をやっているか分からない。おまえが来てくれれば安心だ。間違いなく母さんも喜ぶだろう。すぐに社長というわけにはいかないが、まずは片腕になってくれなものかなあ。今よりはるかに収入が増えるのは保障しよう。考えてみてくれないか」

私はひと呼吸おいてから言った。

「父さんの仕事を手伝うことに関しては考えないでもなかったよ。電話があったときから何となく予感していた」

「そうなのか」

「今は即答できないけれどよく考えてみる。女房の意見も聞かねばならないしね」

「そりゃあそうだ。でもよかった。一発で拒否されると思ってたから」

父は私が幼かったころに見たような懐かしい笑顔を見せた。窓から差す西陽が頬を赤く染めている。私は父の顔に刻まれた皺と毛髪の白さをあらためて見つめていた。今年六四歳になる父にとつて、長いこと社長業を続けられないことは明らかに思えた。居間に戻った父は孫娘をひざにだき、飽きもせず遊びの相手をしてくれた。

数か月後に私は妻と相談して転職を決意した。私は父の工務店に専務として迎えられる。すでに建築家としてそれなりの実績を積んでいたの、すんなり会社の従業員に受け入れられた。大きな建物を手がけられなくなったことに一抹の寂しさを感じたが、おおぜいの従業員と彼らの家族を養っているという充実感には以前にはないものだったし、収入は父が約束してくれたとおり満足のいくものだった。

しかし私が家族を連れて両親の敷地に移り住んで半年もたたないうちに父は過労のため体調をくずし第一線の立場を私に譲った。元請けとの折衝の一部は引き続き父が会長として係わっていたが、現場のことはほとんど社長になっ

た私がみるようになった。

だが、月日がたつにつれ、元請けのG建設が下請けの多くにさらなる工事単価の値下げを要求しはじめた。文句をいう業者は容赦なく排除し、採算ぎりぎり、もしくはそれ以下の値段で仕事をさせようとするのだった。私は設計のプロとして材料の選別や工事の極端な簡略化に異議をとないが、G建設の社長は煮え切らない曖昧な返事をして回答を先延ばしにしていた。

問題の年の三月、G建設はいつもの倍の数の住宅建設を依頼してきた。私がうるさく要求してきた建築材の材質に関してもすんなり意見を入れてくれたし、工事単価についても上乘せをほのめかした。いつも尊大な社長が、父をおだて、後継者となった私をもちあげた。

そのとき気づくべきだったと思う。しかし、設計図ばかりを見てきた私には、その点の洞察力がかけていたのかも知れない。父の人脈を利用して腕のいい職人を集め、休日返上で仕事に没頭した。

そのころ、G建設は牛井屋やカラオケハウス、ゲームの製造にも関わっていたことは報道されていたが、陰で不審な資金集めに奔走していたのを私は知らなかった。あとで明らかになったのだが、まだ完成してもいない住宅の建て主から建築費用のほとんどを回収にかかっていたのだ。ひどいところは基礎しかできていないのに完成価格の半分を

出させていたというし、札証アンビシヤスに上場しているゲーム機の会社からはMSCBという、きわめて胡散臭いファイナンスに手を染めていた。

初夏の風が吹き始めたころG建設は突如破たんした。下請けの要求を寛大に受け入れたふりをして大量の建売り建設を急がせたのも、いま考えれば無謀な資金集めのためだったに違いない。私は父と自分を責めたが、同じ被害にあった人々が数百人もいたとなれば、いかに巧みに事が運ばれたかを理解できる。倒産のニュースが伝わったころ、G建設の社長はとっくに行方をくらませていた。何十件もの下請け業者が路頭に迷い、父が始めた工務店も多額の負債を負って倒産を余儀なくされた。

人々の噂から、社長は別の土地で以前にも何度か似たような方法で会社を閉じたことがあると知らされた。だが後の祭りだ。慎重だったはずの父が、なぜ男の過去を調べもせずに取引関係を結んだのか。私は父への苛立ちを抑えがたかったが、まもなく事情を聴くこともできなくなるのだった。G建設の関連会社は軒並み倒産した。取引きの条件にゲーム会社の株を買わされていた業者は二重の責め苦しなまされた。

支払いがストップされたことで、昨日まで野末工務店に協力してくれた多くの業者たちは目を血走らせた債権者と化した。創業者である父も、社長をひきうけていた私も全

ことができないものとなった。すでに五歳になっていた娘はすっかり新しい父親になじんでいるようだった。それを見たときほど落ち込んだことはない。猛スピードで室蘭に帰ってから、自宅の窓ガラスを何十枚もたたき割って近所の人が警察をよぶ始末となった。

それらしい毎日が惰性で過ぎていった。何の目的も意味も見いだせなくなっていた。暗いアパートに帰り、侘しい食事をしているといっそもかも終わらせてしまいたい衝動をおぼえる。意味なく車を走らせて断崖で立ちつくしたこともあったが、いざそのときになると決断がつかないのだった。

別れた妻の住所と、新しい名前から番号を調べて無言電話を入れたが、いちど娘に違いない少女の声を聴いたときは畳に顔をふせて泣いてしまった。それらしい電話をかけることはやめたが、抑えがたい衝動にかられて遠い道を走り娘の姿を見にいった。自宅の近くや小学校の校庭に通じる坂で待つたこともあるが、なかなか娘を見つけることはできなかった。

耐えきれなくなった私は校庭の中に入っていく、子どもたちの帰宅時間に娘を待ち伏せしたことがある。自分では分からないが、おそらく鬼気迫る表情をしていたのだろう。生徒たちが変なおじさんがいるというような目線を投げかけてきた。胸に二年生のバッジをつけた女の子に近づいて

財産を投げ打ったが支払いのすべてに応じることはできなかった。父が首をくくり、妻が三歳の娘を連れて札幌の実家に帰ってしまったのはその年の冬が始まったころだった。自殺者は私を知るだけで父を含めて三人を数えた。

母は精神を病み、病院から出られない体になってしまった。すっかり信用をなくした私は建築の世界に戻ることはできなかった。翌年の春がきたころ、てっとり早く就くことができたタクシーの運転手をしていた。それらしいイタシキ浜の近くにある日当たりの悪いアパートでの独り暮らしがはじまった。

妻とはやりなおしたくて何度も実家に連絡をいれたが彼女の考えは変わらなかった。むこう何十年にもわたる借金生活に絶望したに違いないが、理由はそれだけでなく、債権者への対応でパニックにおちいつていた最中、二度ほど妻を殴ってしまったことが致命的なようだった。半年後に離婚が成立し、幼い娘ともども、ふたりは名実ともに私のもとから去った。妻の両親からはいつか再起して、そのときあらためて会いにくるよう言われたが、美人だった妻は二年もしないうちに職場の上司に見せられて再婚してしまっ

た。それからまもなく札幌市内を走っていたとき、家族で楽しそうに歩いているところをみかけてしまったことがある。そのときのショックは、いくら歳月がながれても消し去る

尋ねてみた。野末という名前を出してから急いで言いなおした。

「岸本ひなのちゃんという子を知らないかい？」

知らないといっって女の子は通り過ぎたが三人目の子があそこにいるよと教えてくれた。まさしくそこには三年間会っていない娘がランドセルを背負って友だちと歩いていた。

「ひなちゃん」  
娘はキョトンとした顔をしてこちらを見た。明らかに覚えていないという表情だ。私は元気かいとだけ声をかけたが、それ以上話す気にはなれなかった。転がるように坂道を駆け下りた。二度と校庭に通じるこの坂を通るまいとさえ思った。

娘に会いに行くことを諦めた私だったが、娘のために何かをしてあげたいという気持ちは変わらなかった。しかし思いつくことはなく、死んだときに娘を受取人にした保険に入ることにしか考えつかなかった。私が死の衝動を感じるたびに、必ずきまって娘の愛らしい顔が現れ、そのあと多額の現金を前にしてたじろいでいる前妻の様子が脳裏をかすめるようになった。

室蘭までの長い道中、G建設の社長をしていた男の携帯電話が何度かあった。人をくつたような話し方は昔と少しも変わっていない。たわいのないゴルフのスコアの話が延

々と続き、女の話で蛙がひきつけを起こしたような下品な笑い声を響かせた。別の電話は仕事がらみだった。新しく着手する建物に関する話からして、相変わらず以前と同じような仕事をしているのは明白だった。

男は自分が座っている座席のすぐ前に昔の関係者がいるなど思いもよらないのだろう。なんの警戒心もなく使われる材料や工事単価のことを誰かに指示し、売りに出されているラブホテルを近々に買うつもりだから、使うときは安くしてやるとも言った。その会話の何もかもが、白々しい詐欺師の大言に思えてならなかった。

男は休みなくタバコをすい続けた。ヒーターを強めにして窓を開ける。咳がたて続けに出た。室蘭市内に入ってから、国道沿いの一角を通ったとき男はある建物を見て独りごとを言った。

「ここはまだ空き家のままなのか、売れんわなあ、今の時勢じゃ」

血が逆流しなかった。その建物は父と私が事務所にしていた場所だった。ここから病院に直行した母はいまだに心を病み、幸せだったころの影像の中で生きている。

そのあと男は私が訊きもしないのに昔の自分の活躍を語りはじめた。意気揚々たる話しぶりには大勢を奈落の底に叩き落とした後悔や哀しみの影もない。自信に満ち溢れた表情がバックミラーに映っている。男の罪をあばくように

適当にあいづちを打ちながら話を誘導した。

私がまったく返事もせず、男の話が途切れたころ車はおりしも海岸近くの二股坂を通りかかった。角に小学校があり、校庭で遊ぶ児童が目に入ったとき、遠くにいる娘の姿が脳裏をかすめた。そのとき私の中で何か大きな音をたてて裂け、激しくはじけて飛び去った。男が咳払いをして汚れた痰を口から出したとき、私は自らの心の中に波立つ怒りを隠し一気にハンドルを切って国道を左折した。バックミラー越しに男が奇異な表情をしたのが見えた。

「この道を通るのか？」男は不審そうに問いかけた。

男の質問を無視し、蛇行した急な坂道を猛スピードで走り抜けた。景色が歪んで見える。空が縮みこむ。木も草も家も視界の中で溶けて流れ去る。

そのとき脳裏にちらついた家族の顔を払いのけて進んでいくと、またたく間に左手前方に海が幕を開けた舞台に姿を現した。はるか遠くまで不気味な青黒さがあり、雲間からの日差しを受けて波頭が微妙な光りをたたえている。

砂利をけちらし、土手を削りながら枯れかかった草や雑木をなぎ倒して車は進んだ。

「何をすんだあ！」

男は目に恐怖を浮かべて叫んだ。

そのとき、私は海岸を見下ろす、そり立った恐ろしい断崖に向って車先を向け、おもいきりアクセルを踏んだ。